

日本と英国の診療システムの相違

前回2026年2月号においては高齢者の介護政策について日本と英国の現状と違いについて簡単に解説しました。今回は医療制度や診療システムにおける相違について考えてみたいと思います。皆さんすでにご存知とは思いますが、英国の医療の根幹は国民保健サービス(NHS)によって支えられています。国民が支払う税金を財源として運営されており、社会保険と税金の2本立てで運営される日本の医療保険制度との根本的な違いがあります。従って英国ではNHSから提供される様々な医療サービスを一部の薬剤や治療を除いて無料で受けられる仕組みになっています。提供されるサービスの仕組みはかかりつけ医(General Practitioner、通称GP)が担当するプライマリーケアと2次、3次医療を担当する専門医との連携が基本であり、救急外来(A&E)への受診を除けばGPからの紹介がなければ直接専門医への受診はできないことになっています(図1)。まずはGPによる初期診療を受けなければ専門的な診療にたどり着けないことからGPのことをGate Keeper(門番)などと表現されることもあるようです。患者さんの受診理由

病診連携のシステムの相異 (欧州型と日本型)

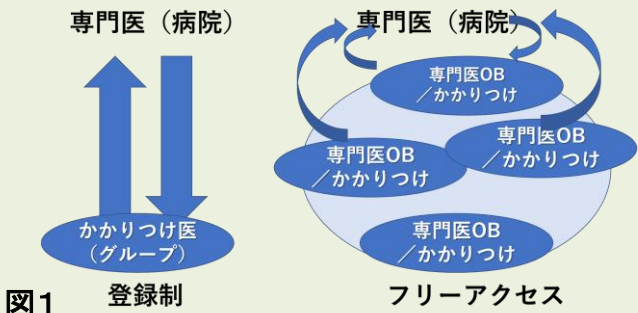


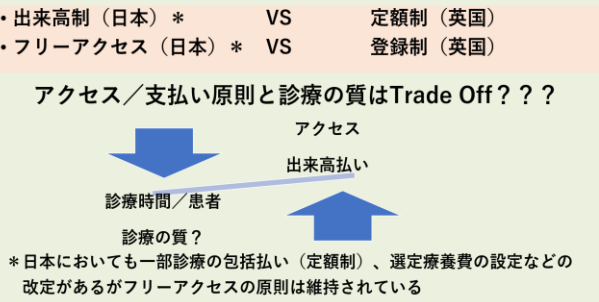
図1 登録制 フリーアクセス

やその原因となる疾患や病態の多くがGPによるプライマリーレベルの診療で対応可能なケースであり、GPが必要と判断した場合のみ専門医への紹介が行われます。この連携ルールによって専門医の診療の効率性(質)が保たれるという利点がある反面、初期診療に対する満足度が得られにくいことも想定されます。GPに電話やメールで相談しても迅速な対面診療にはなかなかたどり着かないことを皆さんも経験されたことがおありではないでしょうか。一方、日本の医師の一般的なキャリアパスでは、何らかの専門性を取得するための研修や臨床経験を経たうえでプライマリーケアに従事するケースが多くを占めており、結果的にかかりつけ医の定義や守備範囲がやや曖昧です。

表 1

	日本型(フリーアクセス)	欧州型(登録制)
利便性(アクセス)	良い(平時は)	登録による拘束あり
専門性	得意(専門)領域あり	プライマリーケアに特化
診療時間	概ね短い(出来高)	長い(登録性 定額制)
診療の質	均質性に懸念?	登録性による競争原理
病診連携	多(診療所)対1以上(病院)	1(診療所)対1以上(病院)
診診連携	相性(専門性)次第	登録制なので基本的でない
患者情報	断片的	集約的
他職種との連携	しにくい(窓口特定しにくい)	しやすい(登録した診療所)

図2 診療原則の対立概念

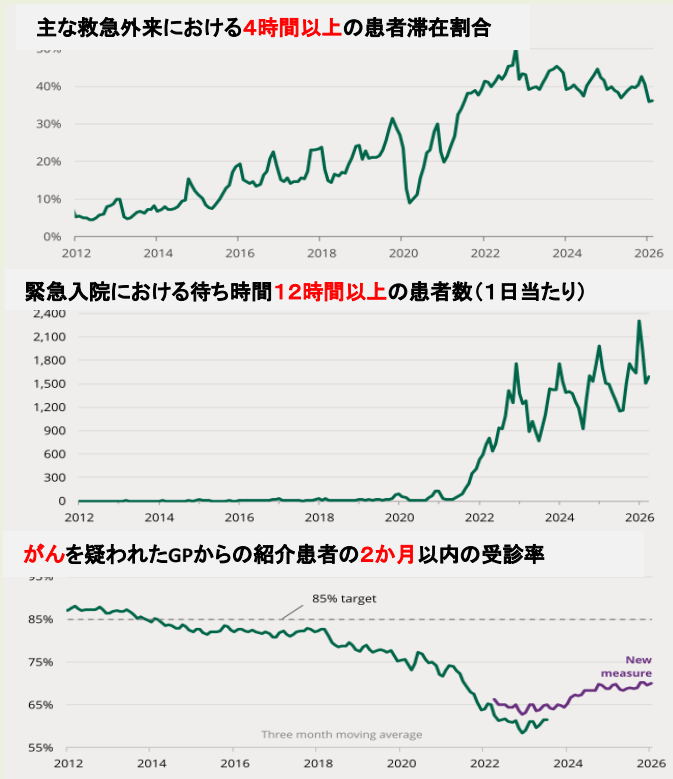


的にかかりつけ医の定義や守備範囲がやや曖昧です。知識や技術において専門性を活かしながらプライマリーケアを提供する診療所も多く存在します。登録制による診療所の受診制限はなく、患者が自らの判断で適宜受診する医療機関を選択する、いわゆるフリーアクセスの原則が堅持されています。近年は大学病院などの専門性の高い医療機関への受診に際しては「選定療養費」というハードルを設けることにより専門医への直接の受診を抑制する方向にあります。制度的拘束力はありません。

以上のように両国の医療制度や連携システムを簡単に俯瞰してみるとプライマリーケアにおける登録制、包括払いは診療の質が均てん化されているという条件のもとでは理想的に思われます(表1、図2参照)。実際、英国においてはすべての医療行為が英国国立医療技術評価機構(通称NICE)の指針に基づくことが無条件に是とされており、各保健地域のIntegrated Care Boardの提出する各臨床指標の比較により診療の質の地域差を縮小する努力がなされています。一方、日本の医療現場においても論拠に基づく診療行為の標準化は重視されていますが、各医師の専門知識や経験に基づく自己裁量に委ねる余地を残しているように思われます。しかしながらこれらの現場の制度設計におけるアドバンテージはあくまで需給バランスが保たれていることが大前提であり、右頁のグラフを見れば明らかのようにコロナ禍以降の医療

予算削減により顕在化した医療需給のひっ迫状況では、かつては「ゆりかごから墓場まで」と諸手を挙げて賞賛されたNHSに自分の健康をゆだねることに不安を感じる国民も多いのではと想像する次第です。長年社会問題化して久しい診療までの待機期間の延長や医療現場の人手不足は現行のNHS診療の枠組みによる需給バランス、ひいては診療の質の維持をいよいよ難しくしていると考えられます。このことが近年富裕層を中心にみられる民間医療保険によるサービス利用への患者の流れへとつながっているように思われます。

アクセスの利便性、専門医療機関との迅速な連携等、医療制度上の日英のギャップを埋めることが私どものような民間医療機関の意義と使命であると考えております。



NHS key statistics: England Research Briefing
Published Monday, 18 May, 2026 accessed at
[NHS key statistics: England - House of Commons Library](#)